

再考・奥州藤原氏四代の遺体

埴原和郎

はじめに

岩手県平泉、中尊寺金色堂の修理に際して、その中に安置されている藤原清衡以下四代の遺体調査が実施されたのは一九五〇（昭和二五）年三月のことだった。この調査は中尊寺当局と朝日新聞文化事業団との協力によって企画・実行されたもので、第二次世界大戦終了後間もない時期でもあり、一大文化事業として国民の強い関心の的となった。

とくに注目を引いたのは遺体を直接調査するという点で、これによって奥州藤原氏にまつわるさまざまな疑問が解けるのではないかと期待された。実際に中尊寺学術調査団委員として参加したのは人類学、法医学、放射線医学、建築学、歴史学、文学、古文化財保存などの分野で当時の権威といわれた専門家であったため、国民の期待は一層高まったと思う。

当時、筆者は東京大学理学部人類学科の学部学生で、長谷部言人名誉教授（故人）、鈴木尚助教授（現・東京大学名誉教授）両氏のほか、大学院生であった先輩の増谷乾氏（故人）がこの調査に参加されたため大きな関心をもってはいたものの、残念ながら調査に参加して遺体を直接観察する機会には恵まれなかった。しかし調査後に鈴木氏から遺体の保存状態を詳しく聞き、それらが自然ミイラか人工ミイラかという点を話し合っただけである。それは、筆者が卒業直後（一九五一）に多数の死体を観察する機会をえて、腐敗の進行について多少の知見をもっていたからである。

その後、筆者はアイヌの人種の起源の研究を土台として日本人の形成に関わる問題に取り組んだが、一九八四年に盛岡市において「東北文化シンポジウム・平泉」が開催され、藤原氏の出身について改めてデータを分析することとなった。

このシンポジウムは、当時東北大学教授であった高橋富雄氏が企画され、中世平泉文化を中心として議論することが主題であったが、筆者は高橋氏の要請により、人類学の立場から藤原氏の人種的あるいは家系的出自について報告することとなったのである。

これとは別に、一九九三年の春になって、筆者は中尊寺円乗院住職・佐々木邦世氏の連絡を受けた。そこで同年六月に京都の国際日本文化研究センターでお目にかかった際、藤原四代の遺体について人類学的所見をまとめるようにとの依頼を受けた。前記のように、筆者は遺体を実見していないので詳細な論考はできないが、一九五〇年当時比べればデータ分析の手段は格段に進歩し、またアイヌを含む日本人集団の形成過程についてかなり明らかになっている点もある。したがって、長谷部・鈴木両氏の原報告書にこれらの新しい情報を加えれば幾分の新知見を得ることができるかも知れないと思ひ、佐々木氏の要請を受諾することにした。

その後、一九九四年のある日——中尊寺の意向により日時を伏せる——になって、筆者は幸運にも短時間ながら遺体を直接観察する機会を与えられた。それは中尊寺が数十年ぶりに遺体の保存状態を確認するため、中尊寺貫首・千田孝信氏立ち会いのもとに開棺した時であった。

右のような経緯に基づき、本稿では原報告書（朝日新聞社編『中尊寺と藤原四代——中尊寺学術調査報告』一九五〇年刊）を土台とし、

これに筆者自身の観察、経験、数量分類学的分析を加え、さらに日本人の集団形成過程を考慮しながら藤原四代の遺体に関わる考察を行う。また佐々木邦世氏より一九五五（昭和三〇）年の「最終報告書」（謄写版印刷）の提供を受けたのでこれも参考とした。なおこの最終報告書は、その後出版された中尊寺編『中尊寺御遺体学術調査最終報告』（一九九四）に収録されている。

この稿では、筆者の専門が自然人類学であることから次の五点に絞って論考を進める。またこれらの点は、「つだ そうきち」（津田左右吉）が「中尊寺のミイラについての諸問題」（一九五五年「最終報告」という文中で述べている疑問の一部に対する答えともなるう。

一、遺体の同定について。

二、藤原四代の遺体は自然ミイラか人工ミイラか。

三、奥州藤原氏の出自。

四、エミシの人種的系統。

五、藤原四代の遺体にみられる「貴族化」現象。

なお奥州藤原氏は京都藤原氏の一族である経清を祖とする（高橋富雄編、一九八五、八〇ページ）とされるが、本稿では便宜上清衡を初代とし、基衡、秀衡、泰衡をそれぞれ二代、三代、四代と記述する。

本稿は前出の『中尊寺御遺体学術調査最終報告』に掲載された筆

者の論文「人類学からみた奥州藤原氏とエミシ」に加筆・修正を加えたものである。また本研究の一部は第四八回日本人類学会・日本民族学会連合大会（一九九四）において報告した。

遺体の同定について

話を進める前に、金色堂に安置されている四遺体の同定に触れておく必要がある。いうまでもなく、各遺体の名が正しく同定されていなければ分析結果の記述に混乱を生ずるからである。

中尊寺の寺伝によれば、金色堂における中央の須弥壇が清衡壇、向かって右が基衡壇、左が秀衡壇とされ、その下にそれぞれの棺が納められている。ところが左右の呼び方が須弥壇から見方向なのか、須弥壇に向かつて見る方向なのかよくわからず、また古記録とは矛盾する多くの事実が発見されたことから議論が起こった。

金色堂内の須弥壇は三つあるが、これらは同時に作られたものではなく、二代と三代の棺が納められている壇は、彼らの死亡のたびにつけ加えられたものである。したがってその造営年代は初代清衡（中央）、二代基衡（向かって右）、三代秀衡（同左）の順になるはずだが、建築学的にみると中央、向かって左、同右の順と思われるという。この点について石田茂作は建築様式から、毛利登は棺内の遺品から、また長谷部言人は遺体の状況から考察を加え、須弥壇に向かつて左が基衡壇、右が秀衡壇であろうと推測している。

また左壇（秀衡壇）の棺の傍らに首桶が置かれ、それに納められた首級は秀衡の次男である忠衡と伝えられていた。しかし顔面や頭部に多くの切創があり、さらに前額に指頭大、後頭部にこれより小さい円形の孔が存在することから、この首級は忠衡の兄・泰衡のものであることは確実とされている。

泰衡は一一八九（文治五）年九月三日に郎従・河田次郎の謀反によって斬首され、頼朝による首実検の後、長さ八寸の鉄釘を打ちつけられた（以八寸鉄釘打付之云々々吾妻鏡、文治五年九月六日条）と伝えられており、頭骨にみられる孔はまさにこの釘が貫通したあとと思われる。また忠衡は実兄である泰衡の攻撃を受けて二三歳で戦死したと伝えられているが、この首級の推定年齢はそれよりやや上ではないかと思われる。とはいえ、泰衡の死亡年齢は二五歳（吾妻鏡）で忠衡とそれほど差があるわけではないので、現代人に比較して歯の咬耗がいくぶん早かったのかもしれない。

以上を整理すると、遺体は次のように同定されることになる。

伝清衡（中央壇）	↓	清衡（変更なし）
伝基衡（右壇）	↓	秀衡
伝秀衡（左壇）	↓	基衡
伝忠衡（首桶）	↓	泰衡

古畑種基ら（一九五五）によると、四遺体のABO式血液型は最終的に次のように判定されたという。

表1 藤原家四代の頭骨計測値（鈴木尚、1950 による）

計測項目	清 衡	基 衡 ¹⁾	秀 衡 ¹⁾	泰 衡 ²⁾
最 大 長	180	187	190	186
最 大 幅	144	152	148	147
長幅示数	80.0	81.3	77.9	79.0
パジオン・				
ブレグマ高	133	142	-	142
長高示数	73.9	75.9	-	76.3
幅高示数	92.4	93.4	-	96.6
頬 弓 幅	138	135	139	138
顔 高	118	129	137	116
上 顔 高	71	79	77	67
顔 示 数	85.5	95.6	98.6	84.1
上顔示数	51.5	58.5	55.4	48.6
鼻 高	59	59	57	51
鼻 幅	26	25	26	-
鼻 示 数	44.1	43.2	46.1	-
眼 窩 高	-	39	38	37
眼 窩 幅	-	46	44	46
眼窩示数	-	84.8	86.4	80.4

¹⁾ 寺伝による

²⁾ 寺伝では忠衡

伝清衡
伝基衡
伝秀衡
伝忠衡（泰衡）
B AB A AB

いずれも母親の血液型が不明だが、これらの型は親子として矛盾はなく、また基衡と秀衡が入れ替わったとしても起こり得る組み合わせである。したがって血液型からみる限り、いずれの場合も否定できない。

次に頭部の計測値によって四遺体の形態的類似性をみるため、鈴木（一九五〇）によって報告された計測値（表1）を用い、類似度

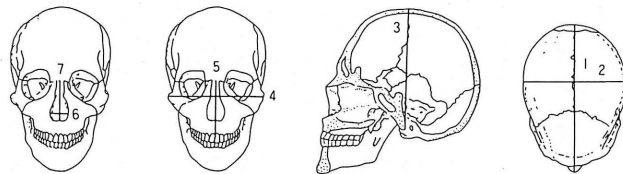


図1 頭骨計測部位（1、頭骨最大長 2、頭骨最大幅 3、パジオン・ブレグマ高 4、頬骨弓幅 5、上顔高 6、鼻幅 7、鼻高）

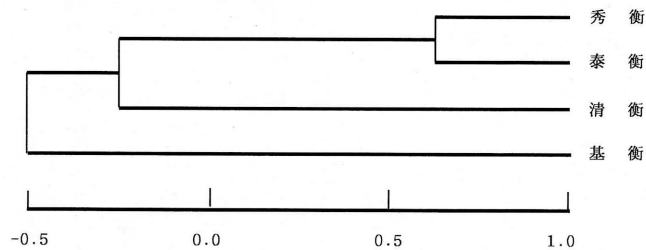


図2 頭骨計測値のQモード相関係数に基づく樹状図 各個体を結ぶ線が短いほど類似性が高い（泰衡を除く名は寺伝による）

係数（Qモード相関係数）を計算してクラスター分析を行った。使用した計測値は四遺体から共通に得られた六項目で、それらは次のとおりである（図1）。

- 一、頭骨最大長（脳頭骨の前後の長さ）
- 二、頭骨最大幅（脳頭骨の左右の幅）
- 三、パジオン・ブレグマ高（脳頭骨の高さ）
- 四、頬骨弓幅（顔面の最大幅）

五、上顔高（下顎骨を除いた顔面の高さ）

六、鼻高（鼻の高さ）

図2はその結果を樹状図で表したもので、清衡と基衡、および秀衡と泰衡（泰衡以外の名は寺伝による）の二つのグループ（クラスター）ができています。これは、それぞれのグループ内の個体が互いに類似しているということを示すもので、清衡と基衡、および秀衡と泰衡がそれぞれ父子であるとの可能性を示唆している。

また別に、同じQモード相関係数から絶対距離行列を計算すると、清衡からの距離は基衡が○・六四五、秀衡が○・七五〇、泰衡が○・八七五となる。したがってこの順位もクラスター分析の結果と一致する。

このように、形態の類似性からみれば基衡と秀衡の遺体は寺伝どおりと考えてよいように思われる。しかしここでも問題となるのは母親の形態が不明であるという点であり、また父・子が必ずしも祖父・孫より形態上の類似性が強いという保証がないことである。

要するに、基衡と秀衡の遺体が果たして取り違えられたのかどうかという問題に対しては、今のところ生物学的に結論を出すことができない。左壇と右壇が新営された後に何らかの原因で棺が入れ替わったという可能性も考えられるのではないだろうか。また泰衡の首桶が伝秀衡の遺体の脇に置かれていたことも示唆的である。なぜなら、秀衡は泰衡の父だったからである。

長谷部（一九五〇）はこの点について次のような慎重な表現をしている。

「今のところ基衡、秀衡両者の遺体の呼び名はいつの頃からか反対になった疑いがあることを述べるにとどめておく」

この問題については、今後さらに遺体そのものの生物学的検査を行わない限り、これ以上の進展は期待できないだろう。なぜなら、遺体の位置が変わっているかどうかを決定的に判断する根拠となるのは、遺体から得られる直接の情報しかないからである。そして現在の分析技術——たとえばDNA分析——を応用すれば、一九五〇年当時比べてはるかに精密で信頼性の高い情報が得られるはずである。ただしこのような再研究が許されるかどうかはまた別の問題である。

ともあれ、現在筆者の手元にあるデータではどちらが正しいかということを客観的に判断することは困難である。したがって以下の記述では、寺伝による各壇の位置を「原位置」、調査によって訂正された位置を「訂正位置」とし、この両方の場合を考慮しながら論考を進めることとする。なお遺体の同定については、後述の「遺体にみる貴族的特徴」の章でもとりあげる。

遺体のミイラ化の問題

清衡、基衡、秀衡の三遺体がミイラ化していることに異論はない

が、それが自然に生じたものか、または人工的な処置がとられたものかという点で調査団員の意見がわかれた。遺体が八〇〇年余を経過して破損が進み、さらに遺体の処置についての古文書もないという状況では、このような問題を解く手がかりはきわめて少なく、意見がわかれることはむしろ自然とも思える。しかし調査報告書（一九五〇）には遺体の状態が詳細に記録されているので、ここではそれらを参考としながら再考してみたい。

まず意見分布をみると長谷部・鈴木は自然説をとり、古畑は人工説である。

さらに森八郎・町田百合（一九五三）は棺内に残る昆虫（ハエ）の脱皮殻の検査に基づいて自然説を支持し、また高橋富雄（一九八五）は歴史家の立場から、遺体そのものに対する処置というより、ミイラ化を可能にするような環境が作られたのではないかと考えている。

長谷部によると、密閉された棺の中ではハエのウジなどが発生することはなく、内臓は自然に腐敗溶解して徐々に皮膚が乾燥したのであろうという。また清衡の遺体でとくに損傷が甚だしいのは、後になって金色堂が荒廃し、ネズミや虫が棺内に侵入するようになったためと考えた。その証拠として、三遺体の棺内にはいずれもネズミなどがくわえ込んだと思われる種子や草の茎が大量に存在することをあげている。

鈴木は日本でも自然ミイラが生じ得るとし、その実例をあげている。また三遺体にみられる皮膚の損傷状態も、仰臥のまま相当期間にわたって放置されたという想定に一致するという。

これに対して古畑は、三遺体の内臓が全く保存されていないことを重視し、死後内臓が人為的に除去されたと主張する。とくに日本のように高湿度の環境では、「…内臓を取り出さずにおいた死体は、万の死体中九千九百九十九は腐敗することは必定だと思う…」と断定的表現で書いている。

ここでいささか筆者の個人的体験を述べたい。筆者は一九五一年三月に大学を卒業し、直ちに小倉市（現・北九州市小倉北区）に赴いた。これは在日国連軍（米軍）の依頼を受け、当時はげしさを増していた朝鮮戦争での戦死体の個人識別を行うためである（埴原和郎、一九六五参照）。

筆者が取り扱った戦死体は死後数カ月ないし一年を経たもので、ほとんど原形を留めないほどに腐乱したものが大部分であった。また筆者自身が行った個人識別の件数は三カ月間で約一八〇〇体に及んだ。それらの死体は戦地でいったん埋葬され、少なくとも数カ月の間放置されていたものである。また埋葬に当たっては戦闘用の個人テントで死体を包むだけで、防腐、納棺などの処置は何も施されていないかった。

死体の状態はさまざまであったが、筆者が実感したことは、ウジ

やネズミなどの蚕食がない限り、内臓や脳の腐敗溶解（腐敗によって細胞内の水分が溶出する現象）にはかなり時間がかかり、同時に皮膚は想像以上によく保存されるということだった。これに対してウジが発生した場合は短時間で内臓が喰いつくされ、大動脈のような大きな血管も形を留めないことが多い。

皮膚の腐敗は手足の指がもっとも早く、次いで前腕や下腿に及ぶ。これに対して胸腹部、背部、大腿部の皮膚は表皮を除いて強靱であり、メスで表面の汚物を除いても容易に破れることがない。

さて三遺体の写真をみると、ほぼ完全に骨が露出しているのは手と足であり、他の部分にみられる皮膚の損傷は、ある程度乾燥してから動物によって破損されたもののように思える。これは筆者が戦死体で経験した状態とよく似ており、自然腐敗が進んだ結果と考えられる。

なお秀衡（訂正位置では基衡）の手足の皮膚はよく保存されており、比較的早く乾燥が進んだのでないかと思われる。秀衡は一一八七（文治三）年一〇月二十九日に死亡したとされ、この日は新暦の一月三〇日に当たるのでかなり乾燥した季節だったと思われる。もしこの推定に誤りがなければ、この遺体にみられるような状態が起ころうとも不思議ではない。

三遺体の内臓がほとんどなくなっていることについてはさまざまな理由が考えられるので、的確な判断を下すことは難しい。しかし

少なくとも、内臓を取り除かなければ死体がミイラ化することはほとんどあり得ないとする古畑の見解には同意したい。鈴木があげているように、例は少ないが日本でも自然ミイラができることがあり、またもし内臓を取り去ったとしたら遺体の腹部が収縮しているはずだが、鈴木によると基衡も秀衡も腹部が膨隆していると記述している。これは、内臓の腐敗によって腹部にメタンガスが充満したためであろう。またもし内臓除去の後に何かを詰め込んだとすれば、少なくともその残存物が後世まで残っているはずである。

三遺体には、内臓とともに脳も残っていないという。筆者が経験した限りでは、脳は内臓よりも長期にわたって残ることが多く、死後直ちに腐敗溶解することはないようである。また古畑も脳まで除去したとはいっていない。そうすると、少なくとも脳は自然に溶解したという可能性が高くなり、内臓はそれより前に溶解し去ったとも考えられる。

つまり、ミイラ化がきわめて早く進むような乾燥地帯では脳も溶解する前に乾固するから、それらは長く残存することになる。しかしこれが残っていないという事実は、遺体が比較的乾燥しにくい状態に置かれたために溶解が徐々に進み、最後に皮膚だけが残ったことを示すと考えられる。

古畑の内臓摘出説についてももう少し考えてみよう。人体解剖の経験者ならばよくわかることだが、腹部の皮膚を大幅に切開すること

なく内臓をすべて取り出すということは至難の業である。古代エジプトにはその専門家があり、代々技術を継承したものと思われるが、日本ではそのような文化伝統も技術も知られておらず、素人にできることは思えない。この点について古畑は間宮林蔵の『北蝦夷図説』や近藤守重の写生図などを引用し、カラフト（サハリン）・アイヌにミイラを作る風習があるので、藤原一族も「このくらいの処置はしたに違いないと考えている」と述べている。

しかし長谷部が指摘しているように、このような風習は北海道アイヌにはなく、むしろ一部のアメリカ・インディアンやアラスカ、アリユーション列島の北方民族のものである。したがって藤原一族がそのような風習と技術を突然取り入れたとは考えにくい。さらに、三遺体の皮膚はかなり損傷を受けているとはいえ、内臓摘出のためとみられるような切開や縫合のあとと認められない。辛うじて秀衡（訂正位置では基衡）の右鼠蹊部に切創らしき傷があったが、鈴木が詳細に調べたところ、これは硬化した皮膚が皺にそって折れたものであることがわかった。また古畑自身、どこから内臓摘出が行われたかという点については何も触れていない。

右のことから、古畑の人工ミイラ説の根拠は薄弱であるように思える。要点を整理すると次のようになる。

- 一、皮膚の腐敗状況は自然腐敗の進行に一致する。
- 二、遺体が密閉された棺内に置かれたこと、棺が土中に埋葬される

ことなく空气中に置かれたこと、また遺体の保存状態などからみて、まず内臓が自然に腐敗溶解してメタンガスを発生し、その後皮膚だけが残って乾燥したという可能性が強い。脳が残存していないことからみても、内臓が溶解し、その水分が徐々に蒸発したことが考えられる。

三、内臓が人為的に除去されたという点については、日本ではそのような文化伝統も技術も知られていないこと、皮膚の状態から内臓摘出を証明することが困難であることなどから、強固な根拠をもつとは考えにくい。

以下は筆者の想像だが、遺体そのものの処置よりも、重要視すべき問題は藤原一族の遺体に対する観念と保存の意志であり、またその実現への努力であるように思える。

清衡以下三代（泰衡を含めれば四代）にわたって遺体を保存しようとした意志はいったいどのような観念によるのか、またそれを実現するために、彼らはどのような努力を払ったのだろうか。この問題は遺体の保存技術や自然的条件を超える文化ないしは思想の範疇であり、藤原一族を中心とする平泉文化を理解するためのキーワードともいえるのではないだろうか。

遺体保存の思想的背景については、一九八四年の「東北文化シンポジウム・平泉」でも議論されたが、明確な解答は得られなかった。しかしこのような文化や観念は日本で普遍的なものではなく、やは

り東北というやや特殊な地域に生じた独特の文化といえるかもしれない。

中国から日本に入定ミイラ（即身仏）の思想が伝わったのは一一世紀であり、一二世紀にはその信仰が確立したといわれる。しかし実際に入定したのは出羽三山の修験僧が多く、現存の即身仏の分布も新潟県や東北地方が圧倒的に多い。この場合は五穀絶ちや十穀絶ちなど、要するに栄養を絶って死に至る方法をとるので、藤原一族の場合とは異なる。しかしその時代背景や地域性を考えれば、藤原一族が「入定」という行為から何らかの思想的影響を受けたという可能性もあるのではないだろうか。

いずれにしても、文化や思想の問題について筆者は門外漢なので深く立ち入る能力はない。そこで残る問題は、遺体保存の実現方法である。

この章で筆者は自然ミイラ説に同意した。しかし完全放置のままでは三遺体が揃ってミイラ化するかどうか、という点には疑問が残る。なぜなら、日本では自然にミイラ化する場合があるとはいえ、それはむしろ稀だからである。しかし一方ではすでに述べたように、遺体そのものに何らかの処置をしたという証拠は認められない。そこで考えられるのは、遺体の乾燥を助ける何らかの手段が講じられたのではないか、ということである。この可能性についてはすでに高橋も述べているが、これにも確たる証拠があるわけではない。

遺体の乾燥を促進する条件は高温と低湿だが、平泉付近の気温は比較的低く、また湿度は意外に高いようである。一九九五年の『理科年表』（国立天文台編）によると、年平均気温は盛岡が九・八度、東京が一五・六度であり、年平均の相対湿度は盛岡が七五％、東京が六四％である。したがって無処置のまま遺体のミイラ化を期待することは無理と思われる。また遺体の状態からみて、即身仏のように栄養失調の状態で死亡したとも考えられない。

そこでミイラ化を可能にする条件はただ一つ、遺体の乾燥が促進されるように周囲の条件を整えることである。古来日本には殯（もがり）の風習があり、『魏志東夷伝倭人条』にもこのことが記述されている。これは天皇の葬儀に関わる行事ではあるが、古くは貴人（権力者）に対して行われたものらしい。したがって藤原一族も、その風習についての知識をもっていたということはあり得ることである。そこで考えられることは、殯宮（もがりのみや）のように遺体を仮安置しておくときに何らかの処置を講じたのではないかということである。

ここで参考になるのは泰衡の首級のミイラである。写真を見ると頬は豊かで、ミイラというよりは死蠟のようにみえる。これは豊富な皮下脂肪が自然に乾燥・鹼化した結果で、遺体に特別の処置をしたとは思えない。この場合は、おそらく首級を輸送するために塩のようなもので防腐処理をし、その後に吸湿・乾燥させたものである。

う。そうすると、他の遺体もほぼ同様に吸湿処理をしながら自然に乾燥させたという可能性が強くなる。

筆者の経験からみると、ネズミなどの害がない限り内臓や脳は徐々に腐敗溶解し、体内に液体が溜まるが、そのような状態になっても皮膚は残ることが多い。そこで液体がなるべく早く吸収されるような処置をとれば、皮膚の損傷は少なくてすむであろう。

鈴木によれば、三遺体では首も胴も背面または側面にかけての皮膚の保存が悪く、これに比して前面の保存状態は比較的よいとのことである。このことから、鈴木は遺体が仰臥のまま相当期間放置されたと考えており、筆者もこの推定に同意したい。そこで、たとえば遺体の下に灰または石綿のような吸湿性のよい物質を敷くか、またはこれらで遺体を包めば皮膚の乾燥が促進されるに違いない。遺体または棺が土葬でなく床の上に安置されたことも、通風をよくすることに役立ったと思われる。

以上は憶測の域を出ないが、少なくとも遺体の保存が意図され、しかも遺体そのものに対する人工的処置がなかったとすれば、遺体の吸湿と乾燥を促進するような何らかの手段がとられた可能性が高い。したがって今後の問題は、遺体そのものに対する処置という意味での「自然ミイラか人工ミイラか？」という議論ではなく、遺体が最初に安置されていた周囲の状況についての考究が必要と思われる。そのためには、わずかな証拠に立って医学・生物学的な議論を

繰り返すよりも、むしろその文化史的背景を探ることが必要であろう。繰り返すが、藤原一族の死体保存の意志は、恐らく平泉を中心とする東北地方独特の文化を象徴する觀念の現れと見るべきではないだろうか。

奥州藤原氏の出自

一世紀から一二世紀にかけてのほぼ一〇〇年の間、四代にわたって奥州を支配した藤原氏の出自については、歴史学のみならず人類学の分野でも大きな関心の的となってきた。

この問題は古代・中世のエミシ（蝦夷）の人種的帰属にも関係し、ひいては日本人全体の形成史にも関わるもので、単に奥州藤原氏の家系に止まる問題ではない。この章では、一九五〇年の中尊寺学術調査団による報告と、筆者が行った統計学的分析の結果に基づいて考察を進めたい。

古文書によると、初代の藤原清衡はみずからを「東夷の遠酋」または「俘囚の上頭」などと呼んでいる。これらの言葉をそのまま解釈すると、自分はエミシの出身であり、その支配者であると言っているようにとれる。しかし一方で三代・秀衡は鎮守府將軍に、またさらに進んで陸奥守に任ぜられている。歴史家によれば、これらの地位は都の貴族にのみ与えられるもので、当時の位階制度では単なる地方の豪族に与えられるものではないという（高橋崇、一九八六

参照)。

従来の歴史学上の争点の一つは、この事実をどのように解釈するかという点にあったようである。つまり、藤原氏がこのような高い地位に任ぜられたのは、その強大な奥州支配力を追認せざるを得なくなつたための特例だったという考えと、藤原氏はもともと都の貴族の出身だったという解釈である。

藤原氏と縁の深い安倍、清原の両氏がエミシの出身であることは余り問題なく認められているのに、藤原氏のみがとくに問題にされるのはその位階のみならず、他にも種々の理由があげられている。

筆者は歴史学の世界に深く立ち入ることはできないが、これらの問題に接近するためには、文献学とは全く別の視点に立つ研究が多少の役割を果たすのではないかと思われる。また古代から中世にかけてエミシと呼ばれた人たちの実態もまだ必ずしも明確ではない。これらの問題について、人類学はどのような解答を提供できるだろうか。

中尊寺学術調査団に自然人類学の分野から参加した長谷部言人と鈴木尚によれば、藤原氏はアイヌではなさそうだという結論になっている。また古畑種基とその研究補助をつとめた清水正一は歯の咬合様式や齲蝕(むしば)の状態から、藤原四代はアイヌらしくないといっている。しかしいずれの論文でも、藤原氏の家系的出自や古代エミシの人種の考察はあいまいのまま残されている。

まず長谷部論文の要点は二つある。第一は、藤原氏の遺体には四体ともアイヌらしき面影はないということ。第二は、ただしこのことから、この四人がエミシではないとはいえず、むしろこの地方のエミシの特徴を代表するものかもしれない、ということである。

この論文を読む限り、長谷部はアイヌとエミシとは別の集団(人種)だと考えていたらしいが、それではエミシとは何かという点が明らかにされていない。さらに古代から中世にかけてのエミシと、近世のエゾとが同じなのか違うのかという点についても明言されていない。つまり長谷部論文では、藤原一族の人類学的特徴をエミシと比較しようとしているのだが、対照となるエミシそのものを明確にしないまま議論を進めているので、論理的な一貫性がなくなってしまうのである。

鈴木も、藤原一族には日本人(この場合はアイヌ以外の和人)の特徴がはなはだ多く、「アイヌと考えるよりも日本人(和人―筆者注)と考える方が穏当」であるとして、藤原氏がアイヌではなさそうだという長谷部に同意している。しかし、エミシとアイヌとの関係についての考察がなされていないことも長谷部と軌を一にしており、藤原氏・エミシ・アイヌ・和人の関係が不明確であることに変わりはない。さらに鈴木論文では、右のように藤原氏がアイヌであることを婉曲に否定しながら、その直後に「藤原一族として見れば日本人と考えて差し支えなからう」と断定的に表現しており、その

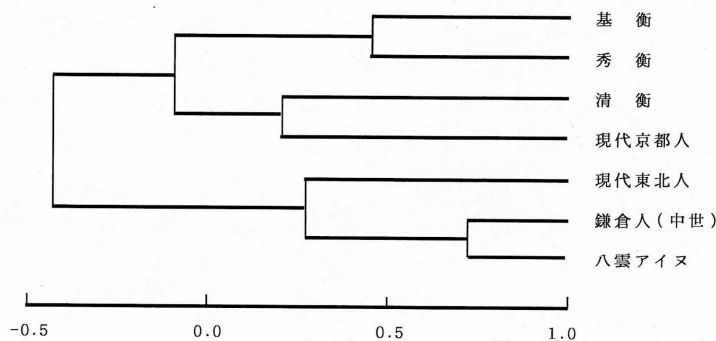


図3 頭骨計測値7項目のQモード相関係数に基づく樹状図 短い線で結ばれているほど類似性が高い (藤原氏の名前は寺伝による)

論理に飛躍がある。

要するに長谷部論文も鈴木論文も、古代・中世のエミシ、近世のエゾ、および現代のアイヌと和人の相互関係を不明確のままにして、しかも藤原氏の人種学的帰属を論じようとしたところに無理があったのである。

とはいえ一九五〇年代という時期を考えれば、まだ日本人の形成過程を分析するための

十分なデータもなく、またデータ分析の方法論も単純な時代であって、ある程度主観的に、あるいは経験則に従って判断する以外に方法がなかったことも事実である。

そこで筆者は鈴木によって計測されたデータをそのまま借用し、改めて統計学的分析を試みた。使用した計測項目は前述の六項目に鼻幅を加えた七項目で、泰衡を除く三遺体について種々の多変量解

析モデルによる分析を行った。なお以下の図ではそれぞれの遺体の名を原位置にしたがって、つまり鈴木が記載したとおりに記述することにする。

まず、藤原一族の形態的特徴を明らかにするために他の集団と比較する。それらは、藤原氏の出自をめぐる論争に関係のあるアイヌ(八雲アイヌ)、東北人、京都人、および四遺体と時代が接近している鎌倉人である。ここで鎌倉人という集団は、新田義貞の鎌倉攻め(二三三三)のときに戦禍にまきこまれて死亡した人びとの骨である。

前と同じ方法によって樹状図を描くと図3がえられる。まず注目される点は、藤原氏の三人が現代の京都人にもっとも近く、時代の近い鎌倉人や近世のアイヌとは遠く、さらに居住地を共有する東北人とも異なっていることである。この結果、藤原氏がアイヌであることはほぼ完全に否定される。また鎌倉人とも大きく違っていることは、藤原氏が中世の人でありながら、当時東日本に住んでいた人たちとも異なっていたことを示す。さらに現代の東北人とも違うことは、藤原氏がかんらい東北土着の家ではなかったことを暗示しているように思える。

このような関係をさらに明確にするため、線形判別関数法を応用した。これは所属不明の個体が、既知の二集団のうちのいずれに属するか、ということを客観的に判別する統計学的方法である。

表2 奥州藤原氏の家系

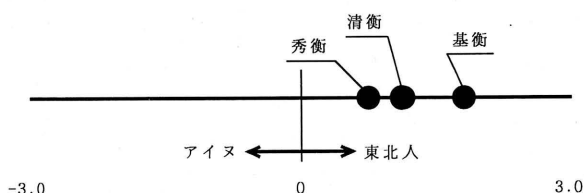


図4 アイヌ・東北集団のデータに基づく判別分析 数値がマイナス(左側)の場合はアイヌ、プラス(右側)の場合は東北人と判別される

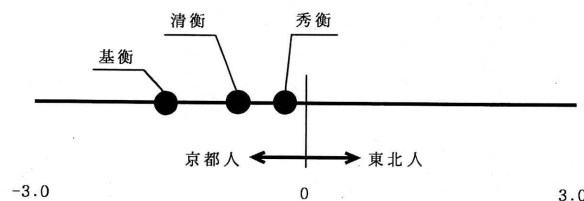


図5 京都・東北集団のデータに基づく判別分析 数値がマイナス(左側)の場合は京都人、プラス(右側)の場合は東北人と判別される

表3 東北人・京都人のデータに基づく判別の信頼確率(名は寺伝による)

	京都人	東北人
基 衡	0.80	0.20
清 衡	0.68	0.32
秀 衡	0.57	0.43

最初に既知の集団としてアイヌと東北人のデータを使うと、藤原家の三人はいずれも東北人と判別される(図4)。この結果は、藤原氏がアイヌ出身ではないことを一層明確に証明する。そこで一步を進め、東北人と京都人を既知集団として分析すると、今度は三人とも京都人の方に分類される(図5)。これは図4をさらに補強する結果だが、さらに興味深いことがある。

仮に清衡の父である経清が京都出身であったとして、家系図(表2)から単純に京都人・東北人(エミシ)の混血率を計算すると、清衡は○・五、基衡は○・七五、秀衡は○・三七五の割合で京都人の遺伝子を受け継いでいることになる。これを数値の高い順に並べると基衡↓清衡↓秀衡となるが、判別の信頼確率(表3)をみるとまさにこの順に並んでいる。仮に訂正位置によって基衡と秀衡が入れ替わったとしても、信頼確率の順位は変わるものの、彼らが東北系よりも京都系の特徴を濃厚にもっているという点に変わりはない。

以上の分析結果は、長谷部・鈴木本の結論と矛盾するものではない。しかしエミシについて筆者は両氏とは異なる考えをもっているので、次にエミシについて考察することにする。

エミシの人種的系統

筆者（一九九〇）はかつて、古代・中世のエミシは現代的な意味でのアイヌでも和人でもなく、その中間型の集団であったという考えを明らかにした。その論拠は以下のとおりである。

アイヌは今でも東南アジア系の縄文人の特徴を色濃く受けついでいるが、本州方面の和人は、主として弥生時代以後に渡来した北アジア系の集団の影響を強く受けている。この影響によって弥生時代以後、アイヌと和人は徐々に分離してきたのであって、古墳時代から中世にかけては、この分離が進みつつあった時代と考えられる。

つまり当時のエミシは現代のアイヌとも和人とも異なり、縄文人的色彩を強く残しながら和人化しつつある集団だったと思われる。

一方アイヌは、遺伝的には渡来系集団の影響をほとんど受けなかったが、文化的には北方民族（サハリン・東部シベリアの民族）との交易を通じて彼らの文化を受け入れ、徐々に独特のアイヌ文化を発展させてきた。現代にみられるアイヌ文化が成立したのは、おそらく一二世紀から一五世紀ころにかけての時代だったであろう。

ところが昔から論争されている「エミシはアイヌか和人か？」という議論は、アイヌと和人が古代から現代と同様に異なっていたという前提に立ち、人間集団の小進化（時間的変化）を無視した話なので、このような設問自体がナンセンスであると筆者は考えている。

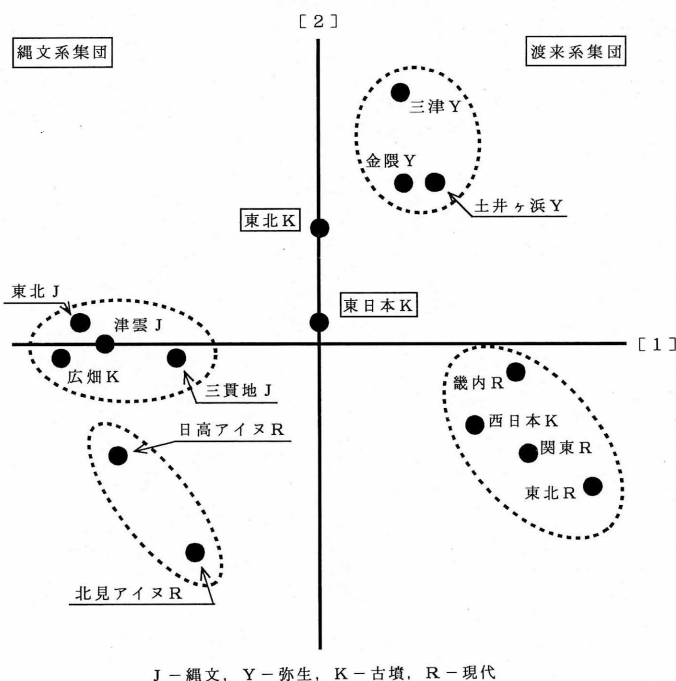


図6 男性頭骨9計測値の第1、第2主成分値に基づく二次元散布図

図6は頭骨の計測値に基づく主成分分析の結果を图示したもので、各集団の形態学的位置を表している。注目されるのは東北および日本の古墳集団で、これらは東南アジア系の縄文集団（図の左側）と北アジア系の渡来集団（図の右側）との中間に位置している。これに対して西日本の古墳集団は現代の和人にきわめて近く、早い時期から渡来集団の影響を強く受けたことを示している。また図には

含まれていないが、中世の鎌倉人や近世と思われる山形県飛鳥の人骨も縄文人的な特徴を濃厚に残しているので、東日本、とくに東北地方では、このような中間的形態が遅くまで残ったと考えられる。

換言すれば、東北地方のエミシは渡来集団の影響を受けることが遅く、そのために西日本集団との差が生じたと思われるのである。

長谷部は、一九五〇（昭和二五）年刊行の調査報告書の後に執筆した「遺体に関する諸問題補考」（一九五五年謄写版印刷、のち尊寺編『中尊寺御遺体学術調査最終報告』に収録）でエミシ問題を再び取り上げて次のように述べている。

「安倍氏やその部下をアイノ（アイヌ―筆者注）の残党などと考える余地はない」

「安倍氏が蝦夷の後裔であるとしても、その蝦夷がアイノであるという証拠はないのである」

これらの文章からみても、長谷部はエミシとアイヌとは別集団と考えていたと思われるが、さらに一步を進めてエミシの実体を明らかにするには至らなかったようである。しかし筆者がこの稿で述べたことから考えると、長谷部の予想は間違っていないかったといえる。

歴史的にみると、東北地方ではエミシが大和政権に組み込まれてから急速に和人化し、アイヌとの差を広げてきた。これは西日本で優勢だった渡来系集団の遺伝子が東日本にも及んできたため、そ

の直接の契機は政治および経済構造の変化に伴う人間の移動であつたろう。そしてこのような東日本と西日本との遺伝的交流は現在も続いているのである。

一九二〇年代から一九五〇年代に至る日本人の生体計測値を分析した河内まき子（一九八三）は、西日本の特徴が今も東北地方に浸透しつつあることを証明した。この研究は、日本人の小進化が今もなおダイナミックに進行していることを示すものである。

「蝦夷」という名称については一つの問題がある。それは、近世以後にエゾと呼ばれた集団は北海道のアイヌを意味しており、その内容が古代・中世のエミシと異なっていたことである。前述のとおり、アイヌが身体・文化の両面でその特異性を明確にしてきたのは中世以後のことであり、アイヌを含む日本人集団が現在の状態になった時期はおそらく一四世紀前後のころと思われる。この時期には、エミシの系統を引くと思われる東北集団の和人化が進んだため、古代・中世に比べると、身体的にも文化的にも西日本と東日本との差が目立たなくなっていた。したがって彼らを「蝦夷＝化外の民」というわけにいかず、「蝦夷」という言葉の意味が変化せざるをえなかったのではないだろうか。

おわりに一言付記しておきたい。歴史学者の高橋富雄（一九八五）は、「造興福寺記」（永承二年＝一〇四七）の記述によって清衡の父である経清が京都藤原氏の一族であることが明確になったとし、

また工藤雅樹（一九九二）は古代エミシについて筆者と基本的に共通する考えを述べている。骨に基づく分析の結果が文献学のそれと一致することは不思議ではないが、互いに証明力を補強する結果がえられたことは学問上重要なことといわねばなるまい。本稿で筆者が提起した問題、たとえば遺体保存の思想的背景、「蝦夷」という言葉の時代的変遷などについて、文献学の面からさらに解明が進むことを期待したい。

遺体みる貴族の特徴

歴代の徳川將軍を始めとする大名家の遺骨を調査した鈴木尚（一九六七、八五）は、これらの遺骨に共通して「貴族の特徴」がみられることを指摘した。それらを簡単にあげれば著しい高顔（面長）、狭顔、狭鼻、高い鼻梁、華奢な上・下顎骨などである。

形態学的に一般の日本人骨とはきわだって異なるこれらの特徴は、特殊な婚姻関係による遺伝的要因に加えて、おそらくは独特の養育法——たとえば柔らかい食物の摂取など——に関連する環境要因が強く働いたためと考えられる。そこでこの章では、藤原四代の遺体が果たしてこのような貴族の特徴を示すかどうかについて検討する。本章では、まず一九九四年の開棺の際に筆者が観察し得た特徴を記載し、それに基づいて「貴族化」の問題を考えることとしたい。

（一）中央壇（伝清衡）

鼻梁は現代日本人に比較しても高く、また鋭く秀でている。このため顔面の形態は立体的・貴族的・現代的な印象を与える。頭蓋縫合は外板でみる限りほとんど癒合せず、年齢に比して若々しい印象を与える。しかし歯の咬耗はプロカの三―四度に達しており、この点は清衡の死亡年齢（七三歳）相応といえる。

四肢骨、軀幹骨、および骨盤は男性としてはやや華奢である。

皮膚は前胸部にはほとんど残存せず、腹部左側、骨盤部および大腿部に残存する。腕部、下腿部および足部にも皮膚は残存しない。

（二）北壇（伝基衡）

鼻梁が高く鋭いことは清衡と同様であるが、印象的な点は梨状孔が狭く高いこと、および梨状孔下縁が極めて鋭いことである。一般に日本人やその他のアジア系集団では梨状孔の下縁が鈍であることが多いが、本遺体の状態は顔面、とくに咀嚼器の退化が進んだ結果、きわめて現代的な特徴に近づいていることを示している。

注目される点は歯の咬耗がきわめて弱いこと（プロカの基準による一―二度程度）で、とくに第二、第三大臼歯の咬合面にほとんど咬耗がみられないことは奇異な感じさえる。

古畑ら（一九五五）は基衡の歯の咬耗状態について次のように記載している。

「歯の咬耗状態、歯牙表面の磨滅状態からみると、基衡の歯は五〇

―六〇歳位のものに相当する―

しかし今回筆者が観察した限りでは、全体としては三〇歳代前半程度の咬耗状態であり、とくに右側の第二、第三大臼歯の咬合面で咬頭や溝が明瞭に残っていることは、かなり若い個体の状態に近い。また清衡や秀衡にみられる咬耗状態に比較しても、その差は歴然としている。古畑らがどのような根拠で歯の咬耗程度を五〇―六〇歳代相当と記載したかは理解に苦しむところである。

死亡年齢について、『吾妻鏡』（文治五年―一一八九―九月二三日条）には基衡が「夭亡」（一部の写本では「滅亡」）したと記述されている。しかし中尊寺学術調査団によれば基衡の命日は保元二年（一一五七）三月一六日、年齢はほぼ五四歳であったとされ、秀衡は文治三年（一一八七）一〇月二九日に六六歳で死亡したとされている。一方『吾妻鏡』の記述では秀衡の没年は基衡の死後三三年とされているので、これをとれば秀衡は建久元年（一一九〇）に死亡したことになる。いずれにせよ、この遺体の歯の咬耗状態はいずれの死亡年齢にも一致しないが、もし基衡の「夭亡」という語を採用し、しかもこれが字義どおりの早世という意味と考えられるなら、この遺体の咬耗が目立って弱いこともうなずける。

ただし歯の咬耗の程度には大きな個体差があり、また食物の硬軟にもよるので一概にはいえない。鈴木（一九六七、八五）は、江戸時代の徳川将軍を始めとする貴族階級で歯の咬耗が著しく弱い例を

報告している。これは主として柔らかい食物をとっていたためと思われるが、本遺体も生前にそのような食習慣をもっていたのかもしれない。しかし一方では、中央壇の遺体（清衡）でも南壇の遺体（伝秀衡）でも歯の咬耗がかなり高度に進んでいるので、当時の藤原一族の食物がとくに柔らかかったというわけでもないように思われる。

要するに他の遺体および一般的にみられる所見を参考にすれば、この遺体の死亡年齢は比較的若かったという可能性を捨てることはできない。したがって、この遺体はやはり基衡であるという可能性を考えておかねばならないだろう。

全体として皮膚はかなりよく残存しているが、手足では骨が露出している。左下腿の筋（腓腹筋、ヒラメ筋）では筋線維の大部分が腐敗溶解した後、わずかに残った部分が乾燥したもののように思える。

（三） 南壇（伝秀衡）

鼻稜が高く鋭く、梨状孔下縁が鋭いことは他の二遺体に共通している。また鼻根部の陥凹が浅いので鼻稜全体が顔面から高く秀で、一見していわゆるギリシャ鼻のようにみえる。眉間および眼窩上隆起は弱く、この部分をみる限りは華奢とも感じられるが、顔面全体の形態、とくに下顎骨は頑丈である。

頭蓋縫合では外板での癒合が軽度で、老化現象が余り進んでいな

いようにみえる。ただし、年齢推定において信頼度の高い内板を検査することはできない。

歯の咬耗はプロカの二―三度に相当するが、大白歯では四度に近く、この状態からみると六〇歳以上で死亡したと考えても矛盾はない。なお欠損歯や歯周病の痕跡からみて、歯の健康状態はやや悪かったようである（古畑ら、一九五五参照）。

皮膚と筋の残存は他の遺体より多く、指の部分にも皮膚が残っている。腹腔および胸腔の内壁はきれいで、内臓が人工的に除去されたというよりは、腐敗溶解して消失したと考えるほうが自然だろう。

（四）首級（伝忠衡、実は泰衡）

鼻稜が高く鋭い点はこの遺体と共通している。上顎の中切歯は右側が死後脱落し、左側のみ残っているが、この歯では舌側面も唇側面も陥凹し、いわゆるダブル・シャベルの特徴を示している。

以上のとおり、四遺体に共通してみられる特徴は高く鋭く秀でた鼻稜、浅い鼻根部の陥凹、狭く高い梨状孔、鋭い梨状孔下縁などである。とくに鼻示数（表1）は日本人としてはきわめて小さい値で、鼻の幅が高さに比して狭いことを示している。

すでに紹介したとおり、鈴木尚（一九六七、八五）によると、これらはいずれも貴族階級にみられる特徴ということになるが、生物学的には遺伝的影響とともに、後天的な影響も考えなくてはならな

いだろう。

遺伝的影響とは、藤原家と母方の家系に伝わる遺伝子の影響であり、後天的影響とは主として成長期の環境である。その主な要因はおそらく食生活であり、小児のころから比較的柔らかい食物をとっていたためではないかと推測される。ただし北壇の遺体（伝基衡）を除いて歯の咬耗度が比較的強く、また下顎骨がやや頑丈な点は近世の貴族形態とはいささか異なるようである。したがって藤原家の四遺体の貴族化の程度は、近世の例に比較すればやや弱いといえるかもしれない。

しかし一方では著しく高い鼻稜や狭鼻のような典型的貴族形態もみられることから、これら四遺体もやはり大なり小なり貴族化の影響を受けたのではないかと想像される。そこで藤原四代の遺体が表示「貴族化」の程度を数量的に分析するため、鈴木（一九八五）が報告した徳川將軍や大名家（貴族群）の頭骨データとの比較を試みることにする。

表4は今回の分析に用いたデータで、比較対象としたすべての頭骨から共通に得られる六項目の計測値である。対照となる一般集団としては鎌倉、室町、江戸の各時代の集団と東北、関東、畿内の現代人集団を加えた。また統計学的分析はこれらのデータと表1に示した清衡、基衡、秀衡のデータを合わせて行った。

図7は右のデータから類似度係数（Qモード相関係数）行列を計

表4 貴族階級および一般集団の頭骨計測値（鈴木尚、1985）

		頭骨最大長	頭骨最大幅	頬骨弓幅	上顔高	鼻幅	鼻高
徳川	家宣	186	144	136	82	26	62
	家重	182	145	140	78	25	58
	家慶	192	156	126	82	23	57
	家茂	184	142	131	82	22	58
	義宣	167	138	113	73	20	55
伊達	政宗	193	140	133	76	26	58
	綱宗	180	144	132	71	26	56
水野	忠武	180.5	141.3	119.6	76.2	21.2	51.6
	忠良	175.2	134.5	119.5	75	23.8	52.3
一般集団	鎌倉	184.2	136.5	134.8	64.7	26.6	51.1
	室町	183.6	138.7	136.2	68.7	26.2	51.7
	江戸	183.5	141.1	136.4	71.8	25.1	53.6
	東北	181.2	139.5	133.4	69.0	25.7	52.0
	関東	180.2	141.8	134.1	71.0	25.1	52.5
	畿内	178.3	141.2	133.5	72.9	26.4	52.4

単位=mm. 一般集団の値は平均値.

算し、それに基づいて各個体および集団を多次元尺度構成法で二次元空間に布置したものである。

一見して明瞭なことは、時代と地域を問わず一般集団が狭い範囲に分布する一方、貴族群の個体は広い範囲に分布し、しかも図の左

方に偏っていることである。逆にいえば、貴族群の各個体の変異は一般集団から大きく離れていることになる。この傾向は徳川家および水野家のすべての個体に共通しているが、伊達家の二人はややその傾向が弱いようである。

藤原家の三人をみると貴族化が著しいのは基衡（原位置）であり、これに対して清衡と秀衡（いずれも原位置）は伊達家や一般集団に

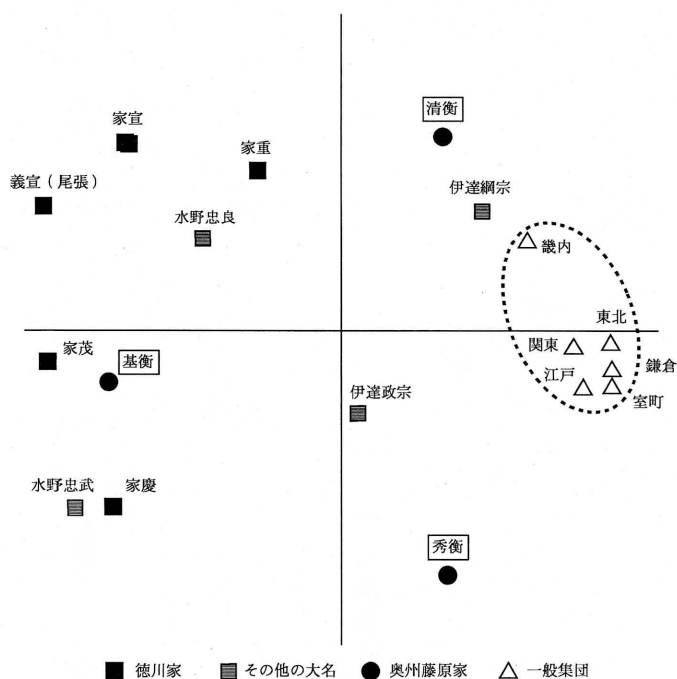


図7 頭骨計測値6項目に基づくQ相関係数行列の二次元散布図

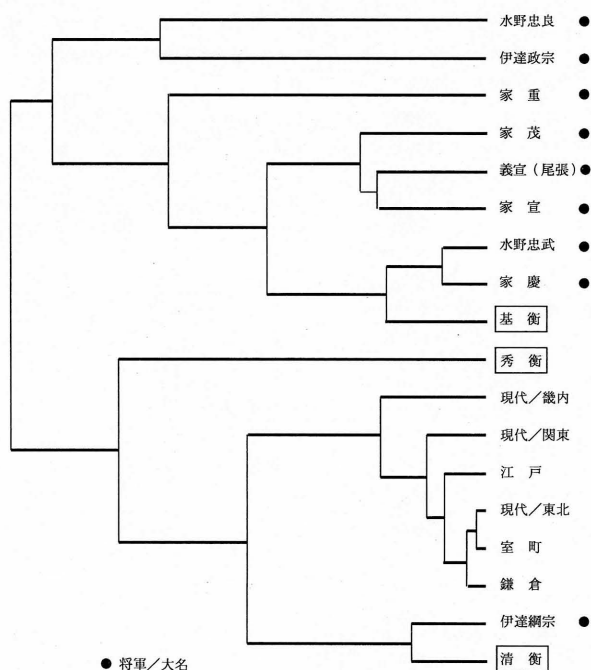


図8 図7と同じデータによる樹状図

図8はQモード相関係数行列から群平均法で作成した樹状図で、貴族群と一般集団が明瞭に分離していることがわかる。注目される

表5 主成分分析における固有値および固有ベクトルの値

これで見ると藤原家の三人は伊達家の二人とともに一般集団に近い貴族タイプといえそうである。

プの鼻をもっている。しか

し顔の高さや幅は近世の貴

族タイプに比して一般集団

に近く、その貴族化は徳川

家や水野家ほどは進んでい

なかつたらしい。伊達家に

ついても同様のことがいえ

る

しかし注目すべきことは

藤原家四代の遺体と時代も

北郷も近い鎌倉時代の一般

集 二 三 一 四 世 紀 と

の違ひが相当に大きいこと

下
お
る

✓
た
り

—
—
—
—

十糸の男といふ田中白。

土地の背景を示す。

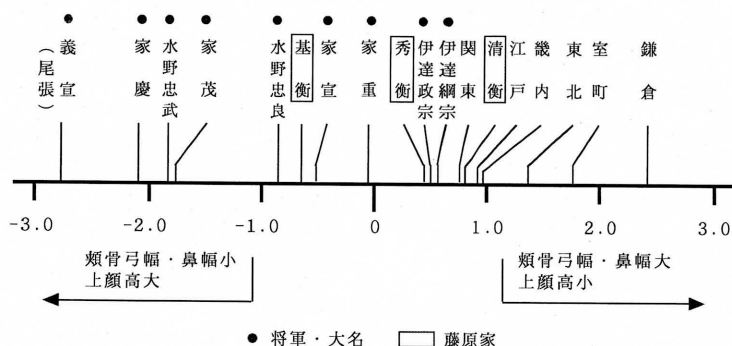


図9 頭骨計測値6項目の第2主成分値による順位

はり藤原家の人びとは当時の一般集団に比較して高度に貴族化していたというべきだろう。

むすび

以上、この稿で述べた種々の分析に基づいて考えると、筆者が最初に提示した設問に対しては次のような解答が得られる。

(二) 遺体の同定について

基衡と秀衡の遺体が入れ替わったかどうかという点については、

現在得られている生物学的データからはいずれとも断定しがたい。

頭・顔面骨の形態や歯の咬耗状態からみると寺伝どおりと考えた方

が合理的と思われる点もあるが、父・子、祖父・孫の間の形態的類

似性はいすれが強いとも言いがたく、また基衡の死亡年齢が必ずし

も明確でないことも判断を困難にする原因である

この関係はDNA配列などの検査によって判明するという可能性

もなしではなしか
どのような検査を行うにせよ、母親のデータが

たし、この種の検査によって致命的である
しすれにせよ、現

右のところに寺佐とおりの「原位置」と調査によって示唆された

「言上位置」の同方を考慮する必要がある。

(二) 自然ミイラか人工ミイラか

遺体の状態からみて、藤原家四代の遺体は自然ミイラであるとの可能性が高い。ただし、遺体の乾燥を促進させる何らかの補助手段

がとられたのではないかと思われる。

(三) 奥州藤原氏の出自

藤原家はがんらい京都またはその周辺地域の出身であるという可能性が高い。しかし東北土着の豪族（安倍氏）と婚姻関係を結んだため、代を重ねるにつれて徐々にその影響を受けるようになったと思われる。

(四) エミシの人種的系統

少なくとも古代・中世に東北地方に住んでいたエミシは現代的意味でのアイヌでもなく和人でもなく、縄文人集団が渡来系集団の影響を受けて「和人化」する過程にあった中間的集団と思われる。したがって「奥州藤原家はアイヌか和人か？」という設問は本来成立せず、強いていえば和人系と東北土着のエミシ系（安倍氏）との混血家系だが、アイヌとは異なるということになる。

(五) 貴族の特徴について

藤原家四代の遺体はいずれも狭くて高い鼻をもち、鼻稜の隆起も高く鋭い。したがって鼻部の形態に関しては近世の貴族階級とはほぼ同程度の貴族化を生じていると考えられ、この傾向はとくに基衡（原位置）に明らかである。しかし清衡と秀衡（いずれも原位置）では顔の高さがやや低く、また幅が広い。この点では鎌倉時代から現代に至る日本人の一般集団に近いので、近世の貴族階級に比較すれば彼らの「貴族化」の傾向はやや弱いといえる。ただしその時代

的・地域的背景を考慮すれば、藤原家四代の貴族化はやはり高度に進んでいたというべきだろう。

謝 辞

この研究は中尊寺学術調査団（一九五〇）に参加された長谷部言人・東北大学名誉教授および鈴木尚・東京大学名誉教授の報告書に負うところが大きい。また高橋富雄・東北大学名誉教授には「東北文化シンポジウム・平泉」（一九八四）に招待いただき、藤原家四代の遺体について再考する機会を与えられた。さらに中尊寺からは種々の資料の提供を受けたが、とくに中尊寺貫主・千田孝信氏、同寺執事長・菅原光中氏、および同寺円乗院住職・佐々木邦世氏には研究に当たって多くの得難い便宜を提供された。本稿を終わるに当たり、これらの方々に厚く感謝申し上げる次第である。

文 献

古畑種基・岡島道夫・清水正一「藤原四代の血液型・指紋・足紋・毛髪・歯」(*)
埴原和郎「骨を読む」、中公新書、一九六五
埴原和郎「人類学からみた奥州藤原氏とエミシ」、中尊寺編『中尊寺御遺体学術調査最終報告』、中尊寺、一九九四、四四九―四八三ページ
埴原和郎編『文部省科学研究費補助金（総合研究・現代日本人頭骨の地理的変異に関する総合調査）』、東京大学理学部人類学教室、一九八〇
長谷部言人「遺体に関する諸問題」、朝日新聞社編『中尊寺と藤原四代―

中尊寺学術調査報告』、朝日新聞社、一九五〇

長谷部言人「遺体に関する諸問題補考」(*)

工藤雅樹『古代の蝦夷(えみし)』、河出書房新社、一九九二

宮本博人「現代日本人の頭蓋骨」、人類学雑誌、三〇巻、一〇—一二号、

一九二四

森 八郎・町田百合「中尊寺藤原氏遺体のミイラの生成について」、柴田

雄次編『古文化財之科学』、五号、一九五三、一—一四ページ

毛利 登「棺内遺品及び基衡、秀衡の錯誤に就いて」(*)

森田茂・川越逸行「湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究

補遺」、人類学雑誌、六七巻、一九六〇、二七八—二九五ページ

鈴木 尚「遺体の人類学的観察」、朝日新聞社編『中尊寺と藤原四代—中

尊寺学術調査報告』、朝日新聞社、一九五〇

鈴木 尚「骨は語る—徳川將軍・大名家の人びと」、東京大学出版会、一

九八五

鈴木 尚「日本人の骨」、岩波書店(岩波新書)、一九六三

鈴木尚・林都志夫・田辺義一・佐倉朔「頭骨の形態」、日本人類学会編

『鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨』、岩波書店、一九五六、七五

—一四八ページ

鈴木 尚ら編『増上寺徳川將軍墓と遺品・遺体』、東京大学出版会、一九

六七

高橋 崇「蝦夷—古代東北人の歴史」、中央公論社(中公新書)、一九八

六

高橋富雄編『シンポジウム平泉—奥州藤原氏四代の栄華』、小学館、一九

八五

つだ そうきち(津田左右吉)「中尊寺のミイラについての諸問題」(*)

山崎正文・山崎正博・欠田早苗・栗栖浩次郎「東北日本人頭蓋の人類学的研究」、人類学雑誌、七五巻、一九六七、九四—九九ページ

Hanihara, K.: *Emishi, Ezo and Ainu: An anthropological perspective.*

Japan Review, 1: 35-48, 1990. (植原和郎「エミシ、エゾ、アイヌ」その人類学的考察)

の人類学的考察)

Kouchi, M.: *Geographic Variation in Modern Japanese*

Sonometric Data and Its Interpretation. University Museum,

University of Tokyo, Bulletin, No. 22, 1983.

(河内まき子「現代日本人生体計測値における地域的変異とその解釈」)

(*) 『中尊寺学術調査最終報告』一九五五(謄写版印刷)、中尊寺編

『中尊寺御遺体学術調査最終報告』(一九九四、限定出版)に収録。